

Title	歐洲人の極東研究(一)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1929
Jtitle	史学 Vol.8, No.1 (1929. 3) ,p.1- 26
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19290300-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

史學

第八卷 第一號

昭和四年三月

歐洲人の極東研究(二)

一 梵語に對するオーストロアジア語の影響

— プシルスキイ氏の近業 —

北印度シンド(Sind)地方のモヘン・ジヨ・ダロ(Mohen-jo-Daro)及びパンジャツプ(Punjab)地方のハラツプ(Harappa)に於て最近行はれた考古學上の大発見は、北印度の古文化が、スメル文明と關係あることを闡明して學界に多大の衝動を與へたが、此發掘と相並行し、佛のプシルスキイ(Przyjalski)氏によつて、言語學上より極めて興味ある研究が發表された。同氏の意見によれば古代に於てインドに侵入せるア

歐洲人の極東研究(松本)

リヤ族の使用せる言語サンスクリトの中には古代に於て印度の北部を占領せるモン・クメル語族の單語混入するといふ。今此處に同氏が一九二一年以降パリ言語學協會紀要(Mémoires de la Société de Linguistique de Paris)及びパリ言語學協會雜誌(Bulletin de la Société de Linguistique de Paris)に發表せる論文の一端を紹介してみよう。

同氏は云ふ。アリア語を使用する人種は印度の土地に於ても様々な言葉を話す住民と長い間接觸してをる。他の語系と毫も類似せぬドラウダ諸語の外北方にはチベット・ビルマ系言語の大群あり、東にはモン・クメル・タイ・ムンダ諸語が點々島嶼の如く散在してをる。チベット・ビルマ語族は一般に支那語及びタイ語に結びつけられてをる。それに反しムンダ語は、カシ語を介してモン・クメル語族及びマレイ半島山地住民の言語に結ばれてをる。ごく最近にもこの南方語群、モン・クメル・カシ・ムンダ等はシナ・チベット語群に屬すべきだといふ説が、コンラデロイによつて提起されたが、この假説はなほ未だ證明されてゐなう(Conrady dans Aufsätze zur Kultur- und Sprachgeschichte vornehmlich des Orients, Ernst Kuhn gewidmet p. 475-504)。ともかく數多い語彙の要素と様々な派生方法(divers procédés de dérivation)が支那・チベットからマレイ及びチヨタナクブル(Chota-Nagpur)臺地に至る廣大な地域上に流布してゐたことは確かである。

アリア人が、氣候溫和な地方から來つて熱帯印度に侵入した時、彼等はその語彙の中に新たに接し

た多くの植物、動物、未知な物産を指稱する何等の單語も有してゐなかつた。彼等がその最初に接觸した非ドラツダ系住民の言葉に夥しい借用をなしたといふことをアプリオリに想像することが出来る。が
ブ氏はいくつかの代表的の例をひいてその事實なりしことを證明しようとする。(註一)

梵 語 *bāna-* (弓)

シュミット師(Le P. W. Schmidt)はそのモン・クメル語音韻論要義(Grundzüge einer Lautlehre der Mon-Khmer Sprachen, p. 30-31)に於て次の諸語を比較した。

モン語 (Mon)

弓で石を投ぐ *pōh, pūh*

その弓 *pūōh*

クメル語 (Khmer)

投ぐ、射る、(綿を)しごく

bōh

綿の梳櫛 *phnōh*

バナル語

歐洲人の極東研究(松本)

弓を射る pōnah, panah

語の内部に中添へ (infixe) が挿入せられるのがモン・クメル語の特徴である。動詞 (pōh, panh) が (u) の中添へ (i-fixation) によつて派生語 (des dérivés) panah, p'nah, phnoh, pnoh を生じた。此派生は正規である。然し何故に同じ語根が弓を射ると綿をしごくといふ作用を示すに使用されたかといふことはアプリアには了解出来ぬ。此著目すべき事實は、もし次の二現象、(一) 即ち印度山地民たるステイアン語に於ては pōh は紡ぐ前に綿を調整するに用ひる具を指し、(二) 同じ語が、他のモン・クメル語に於て弓又は弩の名稱であることを観察すると了解出来る (danaw, ak; riang, ak; 弓・alāk, ak 弩)。

一方に於てセレベスのマカッサル人に於て pāna という語は、矢を射る弓と、綿を清めるに使用される一種の弓とを指稱する。ゾンヌラ (Sonnerat) は同じ様な器具を印度で観察し、之を下の如く叙した。「綿をしごく器械は、至極簡單で、六呎から七呎の長さの木片からなつてをり、その各端に觸れると音を出すつよい腸線 (corde de boyau) をつけてある。従つて此器械はヴァイオリンと呼ばれてをる。ヴァイオリンは天井に附着した弓の弦に、弦線によつて吊り下つてをる。職人は片手にヴァイオリンを中央で握り他手に端に球節のついた木片を持ち、腸線を強く引つ張る。すると弦が外れて、綿を打ち勢よく之を上げ、膨まし、塵をはらひ、紡がれる様にする。ヴァイオリンを支へる弓の弾力性は職人に、之をその打たうとする綿の堆積の上、適宜の場所に近寄せることを容易ならしめる (Voyages aux Indes et a la Chi-

ine, Paris, 1782, t. I, p. 108 et pl. 26)。此道具は詮ずる所重ねられた二つの弓でありヴァイオリンは本
來一木片の兩端に結びつけられた一弦線からなつてをる。グリールソン氏が同じ様なもつと簡単な道具
を「ビハル百姓生活」(G. Grierson, Bihar peasant life, p. 64-65)中に叙述した。

もし綿をしごく弓がマレー群島及びインドと同様印度支那でも使用されたなら、同じ地帯に於て相關
聯せる語が、弓を射ること、弓、或ひは矢及び綿を指す筈である。

此語族に於ては單音綴化せんとする傾向はしばしば古代の形を短縮する結果となつた。

モン語 (Mon) 弓を射る pän

クメル語 (Khmer) 弓を射る pän

ステヒアン語 (Sieng) 弓を射る pän

ロンガオ語 (Rongao) 弓を射る pän

ミュオン語 (Muong) 弓を射る pän

安南語 (Annamite) 弓を射る pän

此等の語がバナル語の panah, ponah と殊なるのは終音(finale)の脱落せること、及び鼻音(nasale)に或
變化の起つたことである。同様クメル語形の始音(initiale)が *ch* といふ有聲音(sonore)と無聲音(sourde)
との中間の不定音であるがこれは安南語に於ては *ch* に該當し、他の大部分の語に於ては *ch* となつてを

ることを注意しなければならぬ。

石を投げる弓 *puah* といふモン語に對しては印度支那山地住民の間に左の語がある。

チュル語 (*uru*) 弓 *panan*

コンチュ語 (*kon-tu*) 弩 *paneng*

セダン語 (*sedang*) 弩 *pöneng, möneng*

ハラシ語 (*halang*) 弩 *meneng*

印度ムンダ語族に於てはサンタリ(*santali*)の *banam* は、ヴァイオリン及びヴァイオリンを弾くことを意味する。この最後の作業は弓を使用することを必要とする。

一方インドネシアの語形は、多く *panah* といふ型に歸する。この語は、マレイに於て弓を指し、ジャバに於て弓と矢を指す。ホルネオのダヤク族に於ては弓は *panah* と呼ばれる。フィリッピンの多くの言語に於て *pana* は矢の名であり、ミンダナオ(*Mindanao*)に於ては *panah* は弓の名稱である。最後にマダガスカルに於ては *fana*, *fala* は同時に弓と矢とを指す。ニウウエンホイス(*Nieuwenhuis*)氏は、インドネシアのかういふ語形を研究し、全マレイ群島に於て *panah* は弓と矢とを同時に昔意味してゐたに相違ないと認めたのは正當である。

かやうにモン・クメル語形を比較すると *pah*, *poh* (弓をひく) といふ動詞から中添へ (*inflection*) によ

つて *panah* が派生したといふことがわかる。かやうにしてつくられた道具の名が同時に弓と矢 即ち弓をひくに使はれる一切をさす理由がわかる。かくしてサンスクリット語 *banā* (弓) の起原は明々白々である。それはオーストロアジア語(註二)からの借用語である。その借用が極めて古代におこつたことはこの語がリグヴェダ (*Rig Veda*, VI, 75, 17.) に存することから知られる。 *banā* に於ける有聲始音 (*initial* *sonore*) はオーストロアジア語の *p* をインドアーリアンにうつしたものでありえぬ。ヴェダにあらはれし形の *o* はそれゆゑなほ今日クメルの文字によつて證明される半有聲音 (*semi-sonore*) の古きことを證據だてる性質のものである。

印度に侵入する前に弓の使用を疑ひもなく知つてゐたアーリヤ人は何故にオーストロアジア民族に矢を意味することばを借りたのであらう。恐らく竹の矢が彼等に知られてゐなかつたので彼等は印度の先住民にその名と物を借用したのであらう。事實マレー群島に於て *panah* と呼ばれし矢は竹で作られてゐた。同様印度に於て *banā* は正しく竹又は籐の矢をさすのである。

梵 語 *karpasa* (綿)

最初弓と矢の名稱であつた *palh*, *poh*, *bōh* と *ś* の動詞は恐らくこの語根の古い形を表はしてゐない。オーストロアジア語に於て終音 (*final*) *h* は、普通古代の *ś* からきてをる。たとへばクメルに於て *amb-*

綿(綿)は *ambas* といふ他の形を有してをる。吾人はそれゆゑ *pah*, *polh*, *boh* といふ動詞の起原に放出物を射出するためか或ひは綿をしごくため弓を扱ふ動作を意味する *bas* といふ語根の存在したことを想像出来る。

今や吾人はオーストロアジア語に於て綿を示す次の諸語の組成を了解するに充分である。

チユラウ (*gran*) *paç, bac*

ステイアン (*sieng*) *pahi*

クメル (*khmer*) *ambas, amböh*

バナル (*bahnar*) *köpain*

セダン (*sedang*) *köpè*

キユオイ (*kuoi*) *kabas*

クチヨ (*koo*) *kopas*

ラーデ (*radè*) *kapas*

マレイ・シヤム (*malais, javanais*) *kapas*

バタク (*batak*) *hapas*

チャム (*cam*) *kapali*

前添へ (prefixe) の有無に關せず此等全ての形の基礎に *bas* という語根があり、その始音 (initiale) は甚だ不安定で一般に *pa* か *pa* になり、その終音 (finale) はしばしば *u* に變り、或場合に於て之を補償する一音を生む。綿の名はそれ故本來「梳かれたる、しごかれたるもの」といふことを意味するのであらう。オーストロアジア語の大多數に於て前添へは簡單で *ka* 又は *ka* である。然し人の知るやうに此語族に於ては鼻音か流動音 (liquide) がしばしば前添へ (prefixe) と語根の間に挿入される、それが恐らくクメル (k) *ambas*, (k) *ambich* といふ始音 (initiale) の脱落した形式を説明しやう。それと同時にインドユーロピア語では解釋つかぬ梵語の *karpisa* (綿) を説明することが出来る。

καρπασος といふ形の下にこの語はギリシヤの語彙にゐつた。エステル書 (Ester) 一の六にあるヘブライの *karpus* といふ語はギリシヤ語 *καρπασος* と同じ様に綿又は亞麻の精製布を呼んだらしい。

梵語 *pata*-, *karpata*-

kar といふ前添へ (prefixe) がつき古代の根より出た梵語 *karpisa*- の外、同じ言語に綿布を意味する *pata* 及び *karpata* といふ二語が存在するのは奇妙である。*pata* と *karpata* を比較すると躊躇なく前添へ *kar* を分離せしめることが出来る。即ち再びオーストロアジア語の範圍にはひつてくる。

karpisa と *karpata* の音韻の點からもまた意味の上からも類似してゐることは此等の語がびつたり重

ねられ得べきものであることを考へしむる。マからマへの移り變りはインドアリア語に於て豫期出來ぬ所であるが、安南語に於てマは規則正しくモン・クメル共通語のマに相當する。

モン (Mon) 毛 sök

クメル (Khmer) 毛 sök

ステイアン (Stiang) 毛 sök

パナル (Palnar) 毛 sök

安南 (Annamite) 毛 sök

「清潔にする、掃ふ」を意味するクメル語 *pos* に對し吾人はラオ語 *pas* を有する。

一方に於て梵語 *karpasa* 他方に於て *pata*、*karpata* はそれ故、時を隔て相ついで借用したるか、又は異なるつた方言を使用する住民より傳來したに相違ない。(註三)

梵 語 *kadali* - バナナ

スキート、ブラグデン兩氏 (*Skreat of Blagden*) は、マレイ半島山地語及び之に親縁關係ある言語の中に於けるバナナの名稱を既に分類した。

マレイ山地住民 プランテエン (バナナ的一種) (*plantain*)

kélu? tēluwi, kéluwi, tēlu, teloi, telei, telēi, telu, telai, tēlu, tēlai, tēlay, tēlai, tēai, tēay, tēai,
te-lé, klé etc

南ニコバル (Southern Nicobar) プランテエン talui

クムス (Kimus) バナナの木 tut taloi

バラウン (Palau) プランテエン kloai

全てのかういふ形はiが一般に現はれる複雑な母音要素のついた始音iからなつた語根を示す。この語根に或時は ke, ge, ta, to, te といふ音綴、或時は單に ke, ta といふ單一音にちゞめられた前添へが附着してをる。この前添へ (préfixe) の音綴の形式中 ke, to, te は印度支那の言葉の中に於て最も古く、かつしばく存在認められる *ka, ta といふ前添へのつゞめられたことは想像できる。一面に於て語根はその始め長いi音をもつてをり、それがいろくの場合に二重音 (diphthongue) となつたらしい。それゆゑ吾人はバナナの古形二つ *ka-i と *ta-i とを再建することが出来る。その第二の形が此處で吾人の興味を呼ぶのである。

既に *ta-i* を生じた同じ方法に従ひ新しい派生語をつくるため此第二語形から出發して吾人は、前添へ *ka* をもつて *ka-ta-i といふバナナのみならずバナナの木を意味する名詞を得ることができやう。之に並行して吾人は梵語に正しくバナナの木を指す *ka-tā* といふ語を有してをる。此語はインドユ

ヨーロッパ語に於ては不可解であるが印度支那語に於て上述の如くたやすく説明される。母音の間においてが有聲音²にかはることはこの語のインドアリア語彙中に包含されるに先立ち、又は後れて起つた通有現象である。

なほ梵語の中に同じ起原らしい *kaṭhā* と *kandā* という二つの形があることを注意しなければならぬ。印度支那語の大多數に於て鼻音がしばしば前添へと語根との間に挿入するのは周知の現象である。

ㄷといふ根に *kada*, *kandā* といふやうな複雑な要素を重ね合したといふことは恐らく不思議にみえやう。古代形を存したオーストロアジア語に於て派生は、單一の前添へ *ka*, *ta*, *pa*, *sa* 等によつてか、せむぜむ一個の音によつて強められた *kan*, *kan*, *kar* 等によつてつくられるといふことは一般に容認されてをる。この判断は吾人の知識のもつと正確になつたとき訂正せらるべきである。既に吾人はモン・クメル語と親縁ありと認められるサルウエン (*Salween*) 川流域のバラウン (*Palauus*) 語に於て有益な證據を手にすることが出来る。同語に於て今日もなほ次の例の示す如く多くの前添へを同時に使用する現象が觀察される (死ぬ *yām* 殺す *p-yām* しなす *pan-p-yām*)。 *kan-da-li* の様な派生語は *pan-p-yām* と同様の要素に分解することが出来る。(註四)

菟醬^{キンマ}の名稱

蒟醬^{キンマ}の葉が、他の産物と共に、印度及び印度支那住民に非常に推重される咀嚼劑の調成に用ひられることは人の知る所である。次の語はオーストロアジア語に於て蒟醬^{キンマ}を指してをる。

アラク (alak) balu

クメル (kimer) mluv

バナル (banar) bolou

ロンガオ (rongao) bolou

スエ (sue) malua

ラヴェ (lave) melu

ステイアン (stieng) mlv

クワ (kha) blu

バラウン (palung) plu

全て此等の形はしばしば始音が *m* と *p* と交替する *malu といふ型に還元することが出来る。長い終音はしばしば *uv*, *ou*, *ua* といふ風に兩分される。母音 *o* は *o* 又は *o* につゞめられ、又はゼロになつてしまふ。

シヤム語では始音が更に變じて唇音で然し有氣無聲音 *pm* となつてをる。

安南の方言は *tran*, *bian* といふ常軌を逸した形となつてをる。然しこの相違はもし中世安南語まで遡ると薄くなる。十七世紀に於てアレキサンドル・ド・ロウド師はなほその字書中に *blan* と表記してをる。次の諸語はもつと複雑である。

ハラシ (halang) lamlu

モン (mon) jablu

マレイ半島 carnbai, carnai, jambai, jambi

最初の二つの名稱に於て前添へのついた *mlu* 又は *bla* 即ち *la-mlu* と *ja-blu* とがまた現れてをる。マレイ半島に於ては前添へは *cu*, *cum* 又は *jan* である。r が i になつた古代の語根は *mai*, *bai*, *bi* とちぢまつてをる。

かくしてインド・ユーロピアの語形、梵語 *tāmbūlam* ハリ語 *tambūli*, *tambūlam* プラクリト語 *tambūlam*, *tambūli* を説明することが出来る。

此處に添附字 *tam* 又は *tam* の先立てる *būla* 又は *bolā* といふ根を認め得る。インドアフリカの要素 *būla* がオーストロアジアの *balu* とことなるは母音が轉換せるだけである。その上モン・クメル語に於て *ka*, *ta* といふ動物又は植物の名を作るに用ひられる前添へは鼻音を仲立として *tan*, *tan* といふ風に語根にしばくつながれるといふことは人の知る所である。 *tom* とか *don* とか *don* といふ形の下に普通ステイア

ン・バナル カムボディアに於て木の名の先についてをるのは疑ひもなくこれと同種の添附字である。
インドユーロピア系でありえないインドアーリヤ *tambula, tam* はそれゆゑ植物と同じ様にオース
トロアジア系である。この結論はもし印度支那語形の語源に遡ると一層確實さが殖える。

**

蒟醬の嚼劑を製するために煙草の紙の様に葉を巻く。次の語はカムボディアに於て巻く動作とそれに
關する觀念を示す。

mur 巻く、轉がす。

poniel 卷かす、轉がさしむ。

mul 圓す。

lomur, romul 卷物。

同様ステイアンに *mul* 圓い *mor* 「煙草を」巻くといふ語があり、シユミット師はこの語をバナル *homul*
と結びつけてをる。

オーストロアジアの語群に屬するインドのムンダ語の領域に於てはサンタリに於て

gulu-mulu 手の平の間でこすりつゝ圓める。圓い、球狀の、

gurmaria 圓い、球狀の、

歐洲人の極東研究(松本)

といふ形がある。

それゆゑオーストロアジア語に於て「巻く」を意味する *mul* 又は *mur* といふ動詞根が存する。蒟醬の葉、即ち巻く性質のものは恐くこの語根からその名を得たのであらう。

**

インドアーリヤと印度支那の語形の比較はフ氏がチャツテルジ (Chatterji) 氏より教へられたベンガル語を説明せしめる。蒟醬を栽培し、之を賣つて生活してをるベンガルの或賤民階級は *baru* と從屬を示す。といふ後添へ (suffixe) から作られた *barui* といふ語によつて示されてをる。梵語化して *barui* は「*baru* によつて生息する者」*baru-jivin* を生じた。 *baru* は蒟醬を示し、明かに印度支那の語形 *balu* 等に親縁がある。

吾人の研究した諸語の比較は教ふる所多い。蒟醬のベンガルと印度支那語形に於て母音は流動音 (*liquide*) につく。 *biru*, *balu*, *blu* がそれである。それに反し梵語とパーリ語に於ては動詞根 *mur/mul* にあける如く *o* は流動音に先んずる。

古代インドアーリヤはそれゆゑ此點について近代語より優つてをる。その上梵語と中世印度語のみ蒟醬の近世語に於てなくなつた前添へ (prefixe) を保存し、梵語に於ては *tam* パーリ語とプラクリト語 (*prakrit*) に於ては *tam* となつてをる。インドアーリヤの *tambula* はそれゆゑ恐らく蒟醬のオーストロ

アジア古名稱の現在知られた最も正しいうつしであらう。(註五)

鋤

鋤はモン・クメル及びインドネシアの主要な言語に於て次の語によつて表されてをる。

クメル (Khmer) ankai

チャム (Cham) lahar, laial, lahar

カシ (Khasi) ka-Iyihkor

テムビ (tembi) tēngila

マレイ (malais) tēngala, taingala

バタク (batak) taingala

マカサル (makassar) nahkala

どういふ風にこの雑多な形を説明するか。これらはインドアーリヤに借用したと想像することが出来るし(梵語 *laingalam*)、或ひは又全て古代の一オーストロアジア語から由来し、その初めと終りとがいろいろの變更をうけ、中間部が最も安定してゐたと想像することが出来る。

最初の説明は重大な困難に遭遇する。*laingalam* という語は、インドアーリヤに於ては語原がわからず

確かにインド・ユーロピヤ系ではない。また上述せる語に相應するものが安南語、即ちその西隣の民の如く印度化しなかつた民族中に存する。

安南語において *caj* (*kai*) は同時に耕すを意味する動詞と鋤をする名詞である。古代に於てこの語は非常に長かつたと考ふことが出来る。然し安南語に於て單綴化する傾向は早くから非常に強く感ぜられてゐたことは人の知る所である。近代形 *caj* に先立つて古代 **kai* を假定することが出来る。事實安南語で *caj* をもつてとりかへられた *caj* という終音は今日まで多くの ミュオン (*muong*) (安南山地の安南系土人) の言語中に保存されてをる。

安 南 *kai* 木

ミュオン *koi* 木

安 南 *doi* 饑ゑる

ミュオン *toi* 饑ゑる

安 南 *hai* 二

ミュオン *hai* 二

安 南 *bai* (鳥が) 飛ぶ

ミュオン *pai, poi* (鳥が) 飛ぶ

安南語 *¹²¹「鋤」「耕す」は一音綴にちまつてを つてもオーストロアジア語形に非常に似てをり、之を離すことが出来ぬ。印度の勢力が此處で問題外である故、鋤のモン・クメルとインドネシアの名稱はインドアリア起原でないと思像することが出来る。langalam は既にリグ・ヴェダの中に存する。然しこの語の二つの「は俗語形を示してをる。

二つに一つの中吾人の擇み得べきは langalam はヴェダの時代に東方の非アリア族に借用した語であると認めるにある。また此問題を他の方向から間接に研究すると同じ結論に達つする。

鋤の外に梵語 langalam は同様「男根」を指す。一面に於て殊に經典とマハーバータに於て langula といふ形式が同時に「男根」と「獸(の)尾」とを意味する。もし langala は langula と同等なることを假定してよいならばたやすく此語の意義の進歩を了解することが出来る。「男根」から、すぐに「鋤」の意味に轉ずる。交接と種を蒔くため地を掘り返す耕耘との間に明白な相似がある。この二語によく似てをり「男根」を意味する linga を仲介させるのは殆ど避くべからざるが故に、此問題は一層複雑になる。

かやうな比較は、インドアリアの舞臺にとまつてをるかぎり音韻上容認しがたい。それに反し近隣の語群に於て充分證明されうる。チャムに於てはたとへば百足は lipan とか lipin と呼ばれてをる。

この同じ語に於て kalik と kulik, kayau と kuyau, kubal と kubal 及び kubul は同じ語形である。マ
レイ半島に於て pulai という木はスキート、ブラグデンによると次の語によつて示されてをる。

tingku, tengkal, tengkol, tängkal, tengkul

tängkal が tengkul に對し、終音のなす tängku が tengkul に對する關係は、langala が tängula に對
し、linga が langara に對する關係と同様である。

かやうにして吾人は數多いとして不安定な形式 linga—langala—langala—langula—langula—はインドア
ノリヤ語がオーストロアジア語に借用した同じ語の様々な形式を表してをると想像することが出来る。
この假定はもし「男根」を意味する linga が東部の非ア—リヤ語の中に對應語を持つてゐるならばもつ
と強められるであらう。

**

次に擧ぐるものがオーストロアジア語に於て男の生殖機關を意味する主なる名稱である。

マレイ半島 lak, la, lo

ステイアン (steng) k-lau

バナナル (bahnar) k-lao

カシ (khasi) t-loh

サンタリ (santali) tailh
 ホ (ho) loó
 ムンダ (munda) loe

全てのこういう形式はなほマレイ半島に認められる E^{h} から派生したように見える。終音 h はたび／＼と變る。又は全く消滅してしまひ、その結果母音を二重母音に變じてしまつた。

此處に於てもまたインドアリア語に借用したといふ假設は排除される。これには二つの理由がある。 E^{h} の母音 h は e の形式から全て派生したやうに見えるオーストロアジア諸語のいづれにも孤立して存せぬ。その上男根の名稱は疑ひもなく古代の * h_2er より出た h_2er といふ語として安南語に存する。安南語に於て子音群は、全て一部は十七世紀以前、他は以降につゞめられたといふことは人の知る所である。

**

要するに全體からみて古代のオーストロアジア語根 * E^{h} が E^{h} 又は E^{h} に終る名詞的派生語を生じたと思はれる。ロなる母音のつく Finalo が存在することはインドアリア語に於てのみ、そしてたゞ一つの Larigula によつて認められるのではない。梵語の languda / yakuta は larigula を真似たやうに見える。その「棒」といふ意味は「男根」から派生することが出来る。梵語 langula (「獸の」尾) と並

行して同じ意味をもつマレイ *ekor* マレイ半島 *ikul*, *ikur*, *ekor*, *kur* がある。

此處に調べた形式の中幾種かは語根の中に挿入されたやうに見える鼻音の要素を含んでゐる。吾人はオーストロアジア語の大部分に *h* といふ中添へが道具の名をつくるのに用ひられてゐることを知る。ここに今研究してをるのに最も近い一例をひいてみる。クメル *chikant* は「塞ぐ、舵を動す」を意味する。*chikant* から中添へによつて派生したものである。それゆゑ上述の非アーリヤ語中鼻音の中添へは身體の一部、男根、尾(獸の)を示す語にはなく、道具の名、即ち鋤の名には存することは注目すべきことである。それに反して借用語に於て豫期出来るやうにインドアーリヤ語は此點に何等の規則性も示さない。*Taguda-Vāṅgula* の對立は何等の形態上の價值もない。

鼻音の中添へと *-in(a)* といふ後添へはクメルに共存したやうに見える。この言語に於ては *boh* は「杭(つきこむ)」ことを意味し *banikul* は「杭」をさす。もしカシの *te-joh* (男根)から *lyrikor* (鋤)が派生した語根 **lak* に遡りうるならば *boh* (つきこむ) といふクメル語から **bak* といふ語根に遡りうる。それが *banikul* 「杭」を説明する。第一の語根 **lak* は、全く假設のものではない。クメル語の中に一異形「腕又は指を(指)指しこむ」といふ語 *lak* を認めることができる。*lar-galama* などといふ派生語は女なる地に鋤の突入ることを表す。男根及び鋤の名稱は、それ故該言語に於て「突込む身體の部分」「突込む所の道具」を意味してをる。

語根の中に中添へを挿入することは語を延し、之を磨損に堪へるやうにする結果となる。これによつて同じ語根から派生した同じ種類の慣用語よりも鋤を意味する非アーリヤ語の長い理由が了解される。

マニイ *tehgala* 鋤

ekur 尾

カシ *ka-lynikor* 鋤

l-toh 男根

インドアーリヤ語がこんなに多数の語をオーストロアジア語に借りたことは不思議に見える。確かに多くの事情があはさつてこゝろいふ結果を生んだのである。或オーストロアジアの民は今日なほ畦をつくるための鋤でなく、種を蒔く穴を穿つために尖つた棒を使用する。こゝにも男根と農具との間の類推が極めて明かであり、非常に広い面積の地方にかゝる意識が存したらしい。ユベールとモース (*Hubert et Maus*) 兩氏によればメラネシアとポリネシアに於て植ゑるために使用する棒は、しばしば男根の形をしてをるといふ。ポリネシアの或種の言語に於ては同じ語が「男根」と「掘る棒」とを指してをる。印度の先住民が最初この棒の使用を知り、地を掘る器具の名稱は、鋤のはひつたのち變らなかつたと考へられる。

一方に於て古代印度支那に於て重要な生殖器崇拜は一般にインドのシヴの崇拜から派生したと考へられてゐる。アーリヤ民族が印度の先住民に *Indig* の崇拜と同様、この偶像の名まで借用したといふ方が一層有り得べき現象である。婆羅門によつて輕蔑せられし土俗的習慣は古代に於て知られる所少い。もし之をよく了解することが出来たら恐らく吾人はもつと明かに何故に *Indig* 系の多くの非アーリヤ語が侵入者の言語中にはひり得たかの理由を一層明かに知り得るだらう。

以上述べた所から印度の古語が印度支那の言葉に親縁關係ある方言を使用した先住民に植物や産物や器具などの名を借用したことがわかる。この認定から少くとも二つの重要な結果が生ずる。

所謂印度支那語はこれまで比較的後代の記録によつてのみしか知られてゐない。しかしこれから吾人は印度の文献中に印度以外の書籍又は銘文中に發見出来るより一層古い形式を見出だし得る機會がある。

その外梵語の單語と印度支那の單語が明白な類似を示す場合今まで一般になした様に第二者は必然的に第一より出たと無批判に容認するのは悪い。之と反對の假定は無批判に排除すべきではない。或場合には之を實證することが出来る。

以上がプシルスキイ氏の所論である。氏はかくして梵語の語彙の一部にオーストロアジア語起原の存

することを立證したが、氏は更に之を補足するため説話學上より、印度の傳説中に先住民族たるオーストロアジア民族の説話より由來するものあることを論じ(註六)、更に進んでは地名學上より西北印度の古代住民がオーストロアジア民族なりしこと、オーストロアジア語とスメル語との間には語彙上の類似あることを指摘してをる(註七)。

同氏の説かれる所には吾人は今後なほ多くの證明を期待するものであるが、少くとも吾人の右に紹介せる梵語中にオーストロアジア語の影響せる事實についての同氏の説は極めて傾聴に價ひする。オーストロアジア文明は世人の考ふるが如くアフリヤ文明の亞流にあらず、却て印度に於てはその起原古く、かつて大なる勢力を有してゐた。モヘンジョダロ及びハラツパの發掘が、古代印度に非アフリヤの文明存在せしことを闡明せし今日、言語學上より古代印度と太平洋文化との交渉を研究するプシルスキイ氏の勞作には今後大いに留意する要がある。

註

- (1) Mémoires de la Société de Linguistique de Paris, tome vingt-deuxième fascicule, 1921, p. 205.
- (2) ハール・シユミットはオーストロアジア語といふ語をもつてモン・グメル語を始め、印度支那山地住民、安南人、バラウン、カシ、ニコバル島の土人、マレイ半島山地民、印度ムンダ族の言語を包含指稱する。フ氏はインドネシア・メラネシア・ポリネシアの言語も之に屬せしめる。
- (3) Bulletin de la Société de Linguistique de Paris, tome vingt-quatrième, troisième fascicule, 1924, p. 65—71.

- (4) Mémoire, *ibid.*, p. 205-207.
- (5) Bulletin, *ibid.*, p. 235—258.
- (6) Le prologue-cadre des mille et une nuits et le thème du svayamvara (*Journal Asiatique*, juillet-septembre, 1924 p. 101-137.)

La princesse à l'odeur de poisson et la Nigé dans les traditions de l'Asie orientale (Etudes Asiatiques, publiées à l'occasion du 25 anniversaire de l'Ecole Française d'Extrême-Orient).

- (7) Noms de villes indiennes dans la géographie de Ptolémée (*Bulletin de la Société de Linguistique de Paris*, Tome vingtseptième, fascicule 3, 1927, p. 218-229).

Un ancien peuple du Panjab : les Uthubara (*Journal Asiatique*, janvier-mars 1926 1-59).

松 本 信 廣